

おじいさんとくわ

小川未明

青空文庫

だんだんと山の方へはいつてゆく田舎の道ばたに、一軒の鍛冶屋がありました。その前を毎日百姓が通つて、町の方へゆき、帰りには、またその家の前を通つたのであります。「どうか、今年も豊作であつてくれればいいがな。」と、話をしてゆきました。家の内で、おじいさんは、その話し声を聞いていました。そして仕事をしながら、「どうか、米や豆が、よく実つてくれるように。」と、鉄を打つて、百姓のつかうくわなどを造つていました。

おじいさんは、できあがつたくわを、店さきにならべておきました。百姓は、みんなこの店で、くわや、かまを買つていくのです。

「もう、くわの刃もへつたから、新しいのを買って帰ろう。」と、一人の百姓は、店さきに並べられたくわを見ていいました。

「ああ、そうだ。私も買ってゆこう。」

「うちのくわも、だいぶん古くなつたから、俺も買ってゆこう。」と、またほかの百姓が、いいました。

おじいさんは、話の好きな、いい人でありました。

「このくわは、私が念をいれて、どうか今年は豊作であってくれるようにと、神さまに祈って造ったくわなんだから、なかなかしつかりできています。」と、おじいさんはいいました。

百姓は、そこにあつたくわを手にとってながめました。

「なるほど、しつかりしている。」と、百姓はいいました。

そして、めいめいが、そこにあつたくわを買って帰りました。

おじいさんは、自分の念をいれて造ったくわが、百姓の役にたつのを喜んでいました。

「あのくわなら、だいじょうぶだ。」と、おじいさんは、百姓が毎日手に力をいれて、田や圃で、くわを振り上げるようすを思つて、独り言をしました。

すると、ある日のこと。いつかくわを買つていった百姓が、はいつてきました。

「今日日は。」

「おじいさん、せんだつて買つていったくわは、まことにいいくわだが、重くて、手がくたびれます。もつと軽くして、造つてください。」といいました。

おじいさんは、「はてな。」と、頭を傾けました。どうして、そんなに重いだろう？

「ああ。わかつた。私は、あのくわを造るときに、米や、豆が、たくさん実ってくれるよ

うにとばかり思おもっていた。それだからだ。」

おじいさんは、うなずきました。

「こんど、軽かるいくわを造つくってあげましょう。」といいました。

「どうか、そうしてください。」と、百姓しやうは、頼たのんで帰かえりました。

おじいさんは、仕事しごと場で、どうか軽かるくて、百姓しやうが疲つかれないように！ と心こころで祈いのりながら、

鉄てつを打うち、くわを造つくりました。

「これなら、手ての疲つかれるようなことはない。」と、おじいさんは、できあがったくわを取とりあげてみて喜よろこびました。

百姓しやうは、やつてきました。そして、そのくわを取とりあげてみました。

「これは、軽かるくて、いいくわだ。」と、喜よろこんで持もって帰かえりました。

「あれなら、だいじょうぶだろう。」と、おじいさんは思おもいました。

ある日ひのこと、また、いつかの百姓しやうがやつてきました。

「おじいさん、あのくわは、まことにいいくわですが、あまり軽かるいので、手てごたえがなく
て困こまります。もっと、いいくわを造つくってください。」といいました。

「はてな。」と、おじいさんは、頭あたまを傾かたむけました。おじいさんは、どうかして、このつき

には、百姓の氣にいるくわを造つてみようと思ひました。

「よくわかった。そのうちに、いいくわを造つておきます。」と、おじいさんはいいました。

「お願いします。」といつて、百姓は帰りました。

おじいさんは、仕事にかかりました。

「どうか、みんなの氣にいるように、おもしろく働かれる、くわができるように。」と、鉄を焼いたり、打つたりしました。このくわが、できあがった時分に、百姓が、やってきました。そして、そのくわを手にとつてみながら、

「なるほど、このくわは、いいくわだ。これなら、私ばかりでない。みんなの氣にいるだろう。」といつて、持つて帰りました。

その後で、おじいさんは、「あのくわなら、悪いことはあるまい。」と、思つていました。

すると、一日、また、百姓が、やってきました。

「おじいさん、ほんとうに、困つてしまいました。どういふものか、あのくわになつてから、仕事を怠つて、話ばかりしていて困ります。どうしたものでしょうか？」と、不思議

そんな顔つきをして、いいました。

おじいさんは、この話を聞くと、しばらく黙って考えていましたが、

「なるほど、話のほうにばかり気をとられても困つたもんだ。こんどこそ、きつと、いいくわを造つておきます。」と、おじいさんは答えました。

「よろしく、お頼みます。」と、百姓はいつて帰りました。

それからおじいさんは、仕事場にすわつて、「よく土の掘れるように。」と、思いながら、鉄を打つて、くわを造りました。百姓は、また店にやってきて、くわをもって帰りました。

「もはや、あの百姓は、なにもいつてきまい。」と、おじいさんは思いました。

はたして、百姓は、やってきませんでした。ある日、顔を見合わすと、

「おじいさん、こんどのくわは、たいへんにいいくわで、みんな喜んでいます。」といいました。おじいさんの店は、ますます繁昌しました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 ㊦」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第2刷発行

初出：「小学少年」

1924（大正13）年4月

※初出時の表題は「お爺さんと鍬」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：雪森

2013年4月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おじいさんとくわ

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>